

《実践報告》

## Co-Creative Learning Session 2018

### 「衣」から紐解く私たちの暮らし～共創で紡ぎだす学びの世界への招待～

緩利 誠 (現代教育研究所所員 総合教育センター)

青木 幸子 (現代教育研究所所員 総合教育センター)

#### 1. はじめに

本稿の目的は、昭和女子大学現代教育研究所が2017年度より新たに立ち上げたコア・プロジェクト「『越境による共創』で創出する中等教育カリキュラム・オープンイノベーションの探求」の一環として実験的に企画・実践したCo-Creative Learning Session第2弾「『衣』から紐解く私たちの暮らし～共創で紡ぎだす学びの世界への招待～」の成果と課題を報告することである。

本研究開発における基本コンセプトとして、私たちは「共創する学び」(通称:コクリ)を提案してきた。そのコンセプトに込めた意図等の詳細は緩利・青木(2018)を参照してもらいたい。ここで言う「共創する学び」とは、自由で温かな雰囲気の中で、仲間とともに「ワイワイガヤガヤ」と知恵を出し合い、未知なるものとの出会いや新たな自分たちの発見に「ワクワクドキドキ」し、夢中になれる学び、のことである。それはまるで「冒険」のような学びであり、クリエイティブでプレイフルに満ち溢れた学びである。教師もまた一緒に冒険に旅立つ仲間として、自分たちの「おもしろい」という感覚を大切にしながら、そのセンスを磨くことにこだわりたいと考えている。

その最初の挑戦として、初年度(2017年度)は「食」をメインピックに取り上げ、跡見学園中学校高等学校の協力のもと、「『食』をめぐる知の冒険に旅立とう!～共創する学びへの招待～」と称する教科横断型の探究プログラムを企画・実践した。詳細は緩利・青木(2018)で報告した通りである。そこで得た成果と課題をもとにブラッシュアップを図ったのが、本稿で報告する第2弾「『衣』から紐解く私たちの暮らし～共創で紡ぎだす学びの世界への招待～」である。学校現場の変革に向けて、私たちは「論より証拠」「分析より企画」「批評より創造」の姿勢でアプローチすることが必要かつ重要であると考えてきた。私たち自身の経験を紐解き、その試行錯誤のプロセスを記録するとともに意味づけ、そこから知恵を編み出すことで、“草の根”的に実践的理論を構築することを目指している。その意味において、本稿は、私たちが辿ってきた「軌跡」をもとに、私たちが編み出した「知恵」を報告し、今後の「挑戦」課題を明確にする性質をもつものである。

#### 2. 「第2弾」実施に至る経緯

今回は、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校を舞台にして、プログラムを企画・実践することができた。そのきっかけは、昭和女子大学現代教育研究所・昭和女子大学大学院生活機構研究科人間教育学専攻が共催した第4回現代教育研究所フォーラム兼第11回昭和女子大学大学院人間教育学専攻フォーラムであった<sup>(1)</sup>。私たちの挑戦を初めて世に問う機会としてイベントを企画したわけだが、当日のプレゼンを聞かれた昭和女子大学・学長(附属昭和中学校・高等学校・校長を兼務)が、その価値を認め、附属での挑戦を勧めてくださった。管理職の共感的理解が組織を動かすことを実感した出

来事であった。

その後、具体的なプログラムを企画していったわけであるが、第2弾のメインピックには「衣」を選んだ。その理由は明快である。生活に身近なところから始めることを最重視する私たちにとって、「衣食住」は全ての生活の基本であり、人間が生きていくうえで欠かせないものである。あわせて、思春期の若者にとってファッションは、これまでも興味・関心の対象であり続けてきたし、独自の衣文化をも形成してきた歴史的経緯がある。その一方で、具体的な企画の立案に向けて、リサーチをおこなったところ、近年、若者のファッション離れなどがニュースで取り上げられており、若者と「衣」の関係に変化の兆しが見受けられることも判明した。そこで、「人間はなぜ衣を纏うのか?」「人間はなぜ着飾るのか?」という本質的な問いを中心に据えて、教科横断的に「衣」を探究すれば、自分たちの「あり方・生き方」を問い直す契機にすることができるのではないかと考え、メインピックに選択したのである。また、学びにおけるアート（芸術）のチカラに注目し始めていた私たちにとって「衣」のもつポテンシャルは魅力的であったのも理由の一つである。

次いで、メインピックの決定後に着手したのが「衣」をめぐる本格的なリサーチである。各教科の教科書も手がかりにしなが、最近の時事問題や科学的な成果、社会的な取り組み、流行・トレンドなどについて、webや書籍、新聞、論文、電車の吊り広告など、あらゆる媒体を駆使してリサーチし、ネタ探しに奔走した。必要に応じて、各種イベントや施設にもできる限り足を運ぶようにした。昨年度同様、その成果は段ボール箱が数個積み上がるほどである。そのプロセスで率直に感じたのは、最初の挑戦で選択した「食」に比べ、「衣」に関するネタ探しは思いのほか難しかったということである。もちろん、私たち自身が、「衣」に関する専門家でないことも影響したが、例えば、一般的なニュースや新聞記事で取り上げられる範囲や頻度、深度などは、やはり「食」の方がより豊かであり、アプローチしやすかった。その点、「衣」に関しては業界紙をはじめ、ファッションに特化した専門サイトやメルマガ、専門雑誌・書籍にあたる必要があり、かなり意識的にリサーチする必要に迫られた。

そうして収集した資料を手がかりにして、そこから各教科を意識しながらジャンルを決定し、生徒たちの心を揺さぶり、冒険の旅への「問い」をインスパイアしてくれる専門家を探し続けた。世の中に各ジャンルの専門家は多くいるが、授業づくりにも長けた専門家を探すのはなかなかの難題である。自分たちのネットワークを頼りにしながらも、それだけでは決して十分ではなかったため、長文のお手紙を書いたり、直接お電話をしたり、講演会に参加していきなりお声がけしたりするなど、「この専門家をお呼びできたら、きっとおもしろい」という自分たちの直感を信じて、あの手この手の方法を駆使してセッションへの協力を交渉・依頼した。もちろん、断られたケースもあるが、最終的に、科学的に衣に迫る専門家、日本の古典と衣をつなぐ専門家、自然環境と衣の関係に想いを馳せる専門家、ファッション業界の光と影に精通した専門家、地域資源を活かした服飾デザインの可能性を追究する専門家、衣を纏う意味を哲学する専門家の6人をお願いすることができ、ミーティングを重ねた。

他方、これらのプロセスと平行しながら、企画書を作成し、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校との協議を重ねて、プログラムの目的、主な内容、具体的な日程、及び参加者募集の方法等を決定した。その後、案内チラシを作成し、参加者募集に努めた。中学3年生から高校2年生までの有志を対象に定め、生徒全員に案内チラシを配布してもらったわけであるが、正直なところ、かなりの苦戦

が予想された。その状況下において、中学3年のスーパーサイエンスコース1期生の生徒たちには、クラス担任のご好意により、直接アピールする機会を設けてもらうことができた<sup>(2)</sup>。そのおかげで、最終的に当該コースの生徒9名が参加してくれることになり、プログラムを実施する目途が立ったのである。ただ、少人数ではあるがその良さを生かして実施すればよいと考える一方で、少人数過ぎるとグループダイナミクスを活かせないという懸念もあったため、急きょ昭和女子大学で教職課程を履修する中学校・高等学校の教職志望の学生たち7名に声をかけ、参加してもらうことにした。結果的にこれが功を奏し、中学生と大学生の継続的な交流がプログラムを活気づける要因になった。

### 3. 実施概要

#### (1) 全体の概要

企画の全体的な概要は次の通りである。第2弾もアフタースクールプログラムとして有志を募り、開催した。約8ヵ月間、土曜日の放課後（不定期）を用いてセッションを構成した。

- 名称：Co-Creative Learning Session（通称：コクリ）
- テーマ：「衣」から紐解く私たちの暮らし～共創で紡ぎだす学びの世界への招待～
- 目的：教科横断型の社会に開かれた「共創する学び」を実験的にデザインし、教師と生徒が共に経験しあう場と機会を提供することにより、これからの時代にふさわしい学びのあり方とつくり方を提案する。
- トピックに応じた目標：
  - ・共創する経験を通じて、縦横無尽にひろがり深まる学びの楽しさと醍醐味を味わう（結果的に共創の基礎的・基本的な技法を獲得する）。
  - ・人間の生活に不可欠な文化的行為とされる「衣を纏う」ことの個人的、社会的、歴史的意味を（体験的に）考察する。
  - ・科学技術の発展が「衣を纏う」ことにもたらした影響を紐解き、未来のあり方を共創的に探究する。
- チラシに記載した案内文：

オシャレをしたい！そう思うことはあっても、ふだんの生活で衣服について、深く考えることは少ないのではないのでしょうか？実は衣服には人々の知恵と科学の力が編み込まれています。それらを解きほぐし、これからの衣生活のあり方を紡ぎだそうとするのが今回の衣（**Koromo**）プロジェクトです。「糸・布・衣」を対象に、原材料をはじめ、糸紡ぎや生地づくり、染色加工、企画製造・制作、流通、ファッション、再利用に至るまで、繊維から生み出される多様な衣生活に焦点を当てながら、衣（**Koromo**）と人との関係を教科横断的に探求していきます。「糸・布・衣」というモノの循環を科学的・地理的・歴史的・文化的にアプローチするにあたり、皆さんを学びの世界に誘ってくれるのが、それぞれの専門家によるセッション（レクチャーやワークショップ）です。そして、各セッションを通しての気づき・発見をもとに、「私たちの衣（**Koromo**）プロジェクト」を開始し、その成果発表に挑戦してもらいます。纏われる布の視点を大切にしながら、衣（**Koromo**）と人との関係を紡ぐ新たなまな

ざしを共創してみませんか？昭和女子大学現代教育研究所がお届けするポップでディープな学びをぜひ味わってみてください。たくさんの方の参加をお待ちしています！

- 協力校：昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校
- 位置づけ：課外活動、有志の募集
- 参加者：計16名（中学3年生：9名、大学生：7名）
- 主催：昭和女子大学現代教育研究所
- 企画・コーディネート：緩利誠・青木幸子
- 備考：昭和女子大学附属中学校・高等学校の教員にも積極的な参観を呼びかけ、主に2名の教員が学内調整等で協力

## (2) プログラム構成

プログラム構成は次の通りである。各教科との関連性を意識しつつ、どの学校でもやろうと思えばいつでも正課のカリキュラムに組み込めるよう、その実現可能性と発展可能性を常に考えながら、本企画のプログラムを構成した。

- トピック：「衣」(Koromo)
- 構成：①全9回、初回は2018年6月9日（土）、月に1～2回の頻度で不定期に開催  
②各専門家セッション、基本的には50分×3コマ、30分のふり返り時間で構成  
③各専門家セッションの期間中、自分たちの日常生活から衣に関する謎や不思議を発見する「はてなノート」に挑戦  
④各専門家セッションの後、グループ単位で「みんなのプロジェクト」を立案・展開  
⑤セッション以外の時間を使い、各グループへの個別指導やアドバイス、リハーサル等を実施  
⑥クラスメートの前でプロジェクト成果発表会を開催
- 内容：※詳細は次頁以降を参照<sup>(3)</sup>
  - No.1 キックオフ＝衣×私生活
  - No.2 専門家のセッション＝衣×理科
  - No.3 専門家のセッション＝衣×古典
  - No.4 専門家のセッション＝衣×歴史
  - No.5 専門家のセッション＝衣×現代社会
  - No.6 専門家のセッション＝衣×家庭・技術
  - No.7 専門家のセッション＝衣×公民（哲学）
  - No.8 みんなのプロジェクト＝衣×プロジェクト
  - No.9 ラップアップ＝プロジェクトの成果発表

**(3) 各専門家セッションの紹介**

初回のキックオフを通じて、生徒たちの衣の世界は一気にひろがりをみせた。衣への感度を高めた生徒たちのさらなる冒険は、各専門家によるセッションへと続く。ここではその一連の様子を紹介する。毎回パワフルな問いを次々と投げかけてくれる各専門家のセッションを通じて、生徒たちは、自分たちの当たり前が揺さぶられ、自分たちの当たり前は当たり前ではないということに気づき始める。そして、衣の世界への新たなまなざしを獲得すればするほど、生徒たちの学びはより一層、深まっていった。いつもの授業とは異なる雰囲気を感じ取る生徒たち、その表情がセッションを経るごとに柔らかく豊かになっていったのが印象的であった。

**No.1：キックオフ【食×私生活】**

2018年06月09日

テーマ	衣と聞いて思いつくことは？～衣の世界への誘い～
講師	青木幸子・緩利誠（昭和女子大学現代教育研究所）
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 「衣」に関する様々なトピックを知る</li> <li>* 「衣」から見える世界に関心を抱く</li> <li>* ニュース・ショー形式のプレゼンに挑戦する</li> </ul>
概要	キックオフは「私と衣」をテーマに「思い出展覧会」からスタート。仲間の服をめぐる記憶の物語がメンバーたちの心の奥を深く揺する。続くワークは「衣と聞いて思いつくこと」をテーマにしてシンキングマップの作成。大好きなブランド・お気に入りのショップ・好きな服はどこから来たのか。仲間の経験・知識を手がかりに衣世界はひろがっていく。そして、メインのミッションは「ニュース・ショー」。新聞・ニュース等、衣をめぐるホットなトピックをベースにタブレットを用いたりサーチを行い、グループごとにその成果をニュース・ショー形式に仕立ててプレゼン。「深刻化する若者のファッション離れ」「ファストファッションの光と影」「繊維と衣服の先端科学」等、膨大な資料と格闘しながら行ったニュース・ショーのラインナップは「量産女子」「エシカルファッション」「ヒートテック」。インタビューアや専門家になりきることで、衣世界へのモチベーションが一気にドライブした。
気づき(例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 服は何からできているか？好奇心を刺激された。</li> <li>* 一枚の服の向こうにひろがる世界を調べてみたい。</li> <li>* ニュース・ショーのプレゼンで、なりきる楽しさにワクワクした。</li> </ul>

**No.2：専門家セッション【衣×理科】**

2018年07月14日

テーマ	私たちの服はなにからつくられている？～衣（繊維）をひも解く科学の魔法～
講師	藤田真理子（北海道大谷室蘭高校）
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 衣服のタグからわかることを考える</li> <li>* 天然繊維と化学繊維の違いを学ぶ</li> <li>* ペットボトルから繊維をつくる</li> </ul>

概要	最初のミッションは「洋服のタグから見えるものは?」。各自の事前リサーチの結果をもちより、繊維の種類と産地をまとめ、「どんな繊維が多いか、それは一体どこから来たものか?」について、データ分析の結果と考察を全員でシェア。その後、天然繊維と化学繊維についてのレクチャー。ベーシックな繊維の話から、近年開発されてきた高機能性繊維やクモの遺伝子組み換えシルクの話へと展開。続くミッション「ペットボトルから繊維を作ろう」を経て、最後のミッションは「繊維の特性を生かした私のおすすめファッションづくり」。繊維を一つ決め、その繊維の特性をリサーチし、「私のおすすめファッション」をグループで考えプレゼン。TPOに合わせた素材、組み合わせ、粹なテーマに盛大な拍手がおこった。
気づき (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 未来の繊維への関心が高まった</li> <li>* 仲間と共に繊維特性を生かしたファッションを考えるのが楽しかった</li> <li>* 繊維の原産地や製造過程についてさらに調べていきたい</li> </ul>

## No.3：専門家セッション【衣×古典】

2018年07月21日

テーマ	魔法少女は天女の羽衣を身にまとうか?～衣装で読み解く古典文学～
講師	中野貴文(東京女子大学)
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 天の羽衣が意味するもの考える</li> <li>* ある服を着るということの意味を考究する</li> <li>* 身体の中で衣に一番近いものを考え、対比する</li> </ul>
概要	まずは、かぐや姫が「天の羽衣を着ることの意味」をグループ・ディスカッション。そこから出てきた「心をなくすとは?」という問いを深めていく。その後、平家物語「那須与一」の話題を経て「なぜ武士たちが戦場で、美しく派手な鎧を身につけているのか?」をお題にしてディスカッション。派手な鎧は朝廷の意思と権威の象徴として機能していたことをレクチャー。話題はナチスドイツの軍服に拡がり、「ある服を着るということは、ある集団に属する人間であることをアピールするものである」という命題に到達。最後は「身体の中で最も衣に近いものは何か?」に「髪」と答えた生徒の発言をベースに髪と同様、「ある服を着るということは社会秩序の中に組み込まれることを意味する」というメッセージで締めくくられた。
気づき (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 衣から紐解く古典の世界がこんなに楽しいことを初めて知った</li> <li>* 自由に服を着るということの意味を考え始めている</li> <li>* 服というものが意味するものが、世界的に通じることに驚いた</li> </ul>

## No.4：専門家セッション【衣×歴史】

2018年08月06日

テーマ	糸紡ぎ&染色ワークショップに挑戦!
講師	富澤拓也・佐々木理恵(東京コットンヴィレッジ)
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* コットンの現状について学ぶ</li> <li>* 綿から糸を紡ぎ、私だけのミサンガをつくる</li> <li>* 藍染とベンガラ染に挑戦する</li> </ul>

概要	コットンに関するレクチャーからスタート。今、日本のコットン自給率はゼロパーセントという驚愕の事実を紹介。そんな日本の大地でとれたオーガニックコットンに触れて、自分の手で糸を紡ぐことに挑戦。まずは綿の種を取り除く「綿繰り」作業。講師の先生が修復した綿繰り機に綿を少しずつ挟み、持ち手をぐるぐる。続いて「綿打ち」で綿ほぐし。ふんわり綿ができたなら、本番の「糸つむぎ」。指のカタチや綿の引き方を学び、いよいよスタート。悪戦苦闘しながらも綿から紡いだ糸を使って、縦糸と横糸で交互に織る「平織り」に挑戦。マイミサンガづくりに没頭するメンバーたち。最後は「藍とベンガラ染め」も体験し、世界に一つだけの手ぬぐいとハンカチが完成した。
気づき (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 自分たちの手でつくりだすことの喜びをカラダで感じたワークショップでした</li> <li>* オーガニックコットンがどうしたら日本で作れるか考えたい</li> <li>* 何かを創り出すことを、一から行う楽しさは格別だった</li> </ul>

No.5：専門家セッション【衣×現代社会】

2018年09月15日

テーマ	ファッション業界の光と影とは？ ～ファッションリテラシーの獲得～
講師	石井大介（昭和女子大学）
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ファッションとはなにかを考える</li> <li>* ファッションブランド進出の戦略を立案する</li> <li>* 一枚の服の向こうにある世界をまなざす</li> </ul>
概要	「最近買った服は何？」「その服を買ったのはなぜ？」からスタートし、世界を席卷するファストファッションの今、そして、ファッションの歴史を学ぶ。「ところで、ファッションってなに？」という先生の問いに「その人を印象づけるもの」と答えた中学生に一同が拍手。続いて「ファッションブランドの海外進出広告戦略」をグループで考え、プレゼン。それを受けて、講師の先生が「DON'T BUY THIS JACKET」と書かれたPatagoniaのポスターを提示。対話を通じてその意図するところを探っていく。ファストファッションのリアルな現状を映像で見たとき、安価な衣服の向こうにある、劣悪な環境、そこで働く人々の姿に声を失うメンバーたち。最後には「Upcycle Training」にも挑戦し、「あしたは何を着よう」、本気で考え始めるメンバーたちだった。
気づき (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ダッカの少女のつぶやき「服は私たちの血でつくられている」が心に響いた</li> <li>* ファッション業界の今について、さらに調べてみたい</li> <li>* 一枚の服の向こう側を知った今、「服」に対するまなざしが大きく変わった</li> </ul>

No.6：専門家セッション【衣×家庭・技術】

2018年09月22日

テーマ	地域資源を活かした服飾デザインとは？ ～自由な発想で服づくりに挑戦～
講師	水谷由美子（山口県立大学）

ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ファッションとはなにかを考える</li> <li>* 地域リソースを活かしたファッションを学ぶ</li> <li>* サステイナブルな服づくりに挑戦する</li> </ul>
概要	<p>「ファッションってなんだろう」の問いからスタート。「ファッションってメッセージ、時代を先取る真善美」と語る講師の先生。スライドを用いたレクチャー付きファッションショーを通じて、デザイナーがファッションに込めたメッセージが明らかに。その中でもディープインパクトだったのはパリのマルタン・マルジェラ展。既成概念を打ち崩されるメンバーたち。続くは、講師の先生がプロデュースされた地域リソースを活かしたファッションショーの紹介。それが刺激となり、クリエイションへの関心は急上昇。メインミッションは「サステイナブル×ワクワクする服を自由な発想で共創」。いらなくなった服や布地の切れ端などを素材に、「彼からのプロポーズデー」「彼の家でのクッキング」「一人で深夜の水族館」、ペルソナ（一人の架空の人物イメージ）から生まれた一枚のリアル・クローズにメンバーたちは感動した。</p>
気づき (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 哲学からクリエイション、ファッションの醍醐味を十分堪能した</li> <li>* 「古いモノから新しいモノづくり、これUpcycle Trainingかも」と気づいた</li> <li>* 着なくなった服が、リボーンしていくのを見て、胸がいっぱいになった</li> </ul>

## No.7：専門家セッション【衣×公民（哲学）】

2018年10月13日

テーマ	<p>ファッションを哲学する？ ～衣を纏う意味の探究～</p>
講師	菊田琢也（昭和女子大学）
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ファッションという言葉からイメージを膨らませる</li> <li>* 魔女の宅急便の「キキ」はなぜ黒い服を着ているのかを考える</li> <li>* 改めてファッションとはなにかを哲学する</li> </ul>
概要	<p>「ファッションと聞いてイメージする言葉は」の問いに「流行、洋服、モデル、おしゃれ、ディテール」と答えるメンバーたち。そこから世界一古いエジプトのチュニックドレスから最新のものまで様々な映像でレクチャーがスタート。バームクーヘン状の塊を機械で彫り上げる「ANREALAGE」の衣服づくりに仰天し、初めてのパリコレ映像にテンションがアップ。続く問いは「魔女の宅急便のキキはなぜ黒い服を着ているのか」。みんな考えた答えは、「誰も私を知らない都会で生活を始めるキキ、ありのままの自分の姿で自分の世界を見つけ、社会での居場所をつくっていく、その修行のために黒というシンプルな服が必要だった」に先生はにっこり。最後は「シンデレラ」の変身シーンから「ファッションの魔法」について考え、「私をあらわし、私をクリアしてくれるもの、それが衣服かも」という結論に達した。哲学する楽しさに触れたメンバーたちでした。</p>
気づき (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 「Clothes make the man」シェークスピアの言葉に感動、ファッションは深い</li> <li>* 服を哲学的に考えることに興味を抱きました</li> <li>* 「私って？」を考えると、一枚の服が大きな意味をもつと考え始めました</li> </ul>

#### (4) 生徒たちが共創したプロジェクトの紹介

各専門家によるセッションに続くのが、「みんなのプロジェクト」活動である。各セッションで得た気づきを手がかりにして、自分たちのプロジェクトの立ち上げに挑戦した。生徒たちには、前もって日々の生活から衣に関する謎や不思議を見出す「ハテナノート」の作成をミッションとした。自分たちが見出したハテナからどのようなプロジェクトを組み立てていくのか、そのプロセスは真剣勝負である。活動時間は実質的に3ヶ月半という厳しい条件であったが、私たちと生徒・学生たちが互いにアイデアを出しあい、本気の対話を通じて最後のプレゼンにまでたどり着いた。

また、私たちの実践では、教師チームもまた必ずオリジナルなプロジェクトを立ち上げ、プレゼンするようにしている。それは、①生徒たちだけが挑戦して教師がやらないのはアンフェアである、②上には上があることを言葉ではなく実演で示す、③担任の先生等も巻き込み、先生方の新たな一面を引き出す、などという意図に基づく。生徒たちが取り上げないであろうテーマをあえて選び、クオリティの高さにこだわって挑戦し、プレゼンを本気で楽しむ。そうした教師の姿が生徒たちに与える影響はかなり大きい。その際、担任の先生方が関わってくださる効果は計り知れない。

各チームが共創したプレゼンの概要は、次の通りである。

##### 【タイトル】 着物リボーン 【生徒チーム】

【概要】 日本の着物は素敵！もっと多くの人に興味を持ってもらいたい！そこから始まった「着物リボーン」。「着物ポリス」も登場する再現ドラマからスタート。そこからいよいよ「着物リボーン」大作戦。ナビゲーターは着物を愛するR先生。和服をめぐる大学生意識調査を手がかりにして、「ステキな着物コーデ」「着物がステキに大変身」「カンタン、きれい、一人で着られる着物術」R先生のレクチャーで「着物大好き少女誕生」まちがいなし。

##### 【タイトル】 未来の繊維って？ 【生徒チーム】

【概要】 「海の魚はかわいそう」マイクロプラスチックによる海洋汚染の原因が、なんと私たちの着ている衣服だったなんて。化繊製品から剥がれ落ちる糸くずなどのマイクロファイバーが洗濯機の排水溝から流れ出て海を汚染している。その現状を洗濯実験から検証です。人にも環境にもやさしい繊維ってなんだろう。リサーチの先で出会ったのは、「バナナ繊維」に「クモの糸＝スパイバー」、きわめつけは「ウナギ繊維＝ヌタウナギーヌ」。

##### 【タイトル】 フューチャークローズ 【生徒チーム】

【概要】 タイムスリップした先で、未来のリアルに出会った私が受けたディープインパクト。「AIがもたらすファッションの未来はユートピアか、それともディストピアか」。地球環境問題とリンクさせながら考える未来服。それは、単なる機能やファッション性の追究を超え、人が生きるといふこと、衣をまとうということ強く考えるということなのだ。そんな私たちが考えるフューチャークローズ、いかがでしょう。

**【タイトル】 思い出保存プロジェクト 【学生チーム】**

**【概要】** 一枚の服を通して考える、人・社会そして私。私の着ている一枚の服が語りだす、故郷バングラデシュの、そして仲間たちの物語。一枚の洋服の向こうにある過酷な現状。ファストファッションの光と闇を知った私たちは、こうつぶやく。「この服はどこでつくられたのだろう」。そして、服に語りかける。「この服につむがれた私自身の思い出」を。思い出保存プロジェクト、それは、「世界に一つの私だけの宝物」をつくること。

**【タイトル】 カンガを巡る旅～スワヒリの風に吹かれて～ 【教員チーム】**

**【概要】** 東アフリカ、ケニア・タンザニアから誕生したカラフルな布「カンガ」。これには、スワヒリの女性たちの生活の知恵と大きな愛がいっぱい詰まっている。色鮮やかで、かわいいデザイン。一枚一枚にプリントされたカンガセイイングのユニークさ。いろいろな巻き方・使い方ができるフレキシブルな布、「カンガをめぐる旅」。タンザニアで出会ったニーニャが語るカンガの物語、それは、遠い日の一人の日本人の物語へとつながっていった。

### (5) 生徒・学生たちのコメント紹介

第2弾においても、まさに試行錯誤の連続であった。走り続けている最中はふり返る余裕すらなかったが、全てのプログラムを終えてふり返ってみると、確かな生徒たちの変容を実感する。第2弾では、学生が参加してくれていたことも、生徒たちにとって大きな刺激になっていた。自分たちとは違う視点から物事を考え、発言してくれるからである。また、先生とは違う「お姉さん」という「ナナメの関係」がもつ教育効果も発揮されていた。もちろん、学生もまた生徒たちから刺激を多分に受けており、お互いが相乗的に学びの効果を高めていたといえる。生徒や学生たちは今回の実践をどのように受けとめていたのか、その一端を紹介しておきたい。今回の実践の成果と価値は、生徒・学生たちのコメントに凝縮されている、私たちはそう受け止めている。

#### 【生徒たちの代表的なコメント】

- ・自分が何気なく着ていた服だけど、その服はとっても苦労して作られていた。服を作ることによって環境が汚染されていることにも驚いた。惹きつけられることが多くて、とにかく楽しかったです。
- ・毎日着ている衣服、すごく身近な存在だったけど、色々な視点から見ることで、様々なことを知ることができた。これからも色々な視点から一つの物を見ることを、色々な場面で生かしていきたいです。
- ・元々は衣に興味はなかったのですが、服のデザインとかをみんなで考えたり、繊維を作ってみたり、色々な体験ができて、ファッションは面白いことに気づきました。これからも大切に服を着たいです。本当に毎回楽しかったです！
- ・普段の授業と違い眠くならず、自分の知らないことを知れて、それをもっと知りたいと思うようになった。みんなで色々意見を考えたり、大学生の意見も聞けて、たくさん交流できて楽しかったです。
- ・いつもの授業よりも前のめりになって、いつものまにか興味・関心を持っていたのが普段と違った。

- ・通常の学校の授業は教科書の内容を教えるだけで、とてもつまらないと感じる時もあった。しかし、衣プロジェクトは、毎回すごく面白くて、セッションの日が近くなるとわくわくした。毎日衣服のことを考えるようになりました。
- ・あらゆる視点から服とか繊維とかを見つめ、何となく普段着ていた服の裏側を知れたし、これからどうしたらいいかも考えられたので、今後に生かしたいなと思いました。
- ・私たちがいつも着ている衣の裏側など普段なら到底知りえないことを知ることができ、プロジェクト後では衣に注目しながら生活するようになった。いつも受けているような授業と全然違い、すごく面白くて、とても楽しかったです。
- ・自分で知りたいことを探求して、グループや皆で話し合っ結果を出せた。プロジェクトを行う前は、服はただ着るものだったが、プロジェクトを通して、服について様々な角度から知ることができ。服についての興味も深まった。これから生活していく時、今回学んだことを生かしていきたいと思った。
- ・とても楽しかったです。衣についてよく考えるようになりました。一つの物事をいろんな視点から見ることができて、それぞれ良いところや問題点があることを知った。また何か一つのことを追求してみたい。

#### 【学生たちの代表的なコメント】

- ・服目線に立ってすぐ捨てられてしまうファストファッションについて考えたことで、自分の今までのファッション観（シーズンごとに服を買えばいい、ずっと同じ服を着ているのは恥ずかしい）に気づいた。
- ・これまで私は「衣服は自己満足感が強い」というファッション面を強く見ていた。しかし、今回のプロジェクトを通して、ファッションだけでなく環境、歴史、デザインなど、様々な関わりを学ぶことができた。また、そこにある人の思いも知ることができた。衣には様々な可能性があることを知りました。
- ・今まで衣服について学んだことがなく、正直不安でしたが、毎回来てくださった専門家や先生たちのおかげもあり、楽しく学ぶことができました。
- ・一つの考え方にとらわれなくなったと思います。関係ないと思いがちなところでつながっていて、ムダなことはないんだなと思いました。また、他の教科と関連して知識を広げる大切さを学びました。一つの教科に終わらず、多方面から考えることで、できることがこんなに増えるとは思いませんでした。
- ・洋服を買う時に本当に長く着れるか考えてから買うようになった！また、新しい知識や見方を子どもたちに提示する際、出会わせ方が大切だなと感じました。
- ・普段考えない服についてじっくりと考えることができた。以前よりも“繊維”のことを考えるようになった。服を見ても「これは一本の糸から作られ始めたんだな…」と思うようになった。
- ・私は今まで衣服を「作る」というところに重点があったため、糸を紡ぐことや、衣服がかかえている多方面での問題について知ることができ、衣服を作ったり着たりする時に様々なことを考えることができるようになった。私にとってコクリが理想の「学び」です。

## (6) 次年度へ向けた発展の兆し

生徒たちが共創したプロジェクトの成果発表の場に、参加生徒たちのクラスメートはもちろん、関心のある数名の先生方も出席して下さった。特筆すべきは、昭和女子大学・学長（附属昭和中学校・高等学校・校長を兼務）も来てくださり、全ての発表が終わった後、急遽、翌週の全校発表会でコクリ代表チームにも発表してほしいというご依頼を頂いたことであった。「フューチャーローズ」を代表チームに選び、その他のチームのメンバーも協力しながらブラッシュアップして全校発表会に臨んだ。ドラマ仕立てで聞き手の心を揺さぶるコクリならではのプレゼンがもたらしたインパクトは大きく、昭和女子大学昭和中学校・高等学校で「コクリ」が市民権を得た瞬間であった。思いもよらぬ幸運に恵まれ、次年度の挑戦に向けた新たな道が拓けたわけである。その後の詳細は別稿に譲る。

## 4. 総括と今後に向けて

コクリ第2弾の実践を終え、生徒・学生たちのふり返しシートのコメントから単語の出現数を分析してみた。その結果をもとに、単語の出現頻度が高いほど大きく表示されるワードクラウドの技法を用いて作成したのが右記の図である。最も多かったのが「楽しい・おもしろい」であり、その他にも「できる」「知る」「考える」「作る」「参加」「興味・関心」「視点／見方・考え方」などが多かった。コクリ第1弾と類似の結果であり、その時も「楽しい・おもしろい」がトップであった。「教師も生徒も楽しさやおもしろさを追及し、そのセンスを磨き続ければダイナミックな学びが創発できるのではないか」という仮説を掲げる私たちにとって勇気づけられる結果を得ることができた。引き続き、追求していきたい。

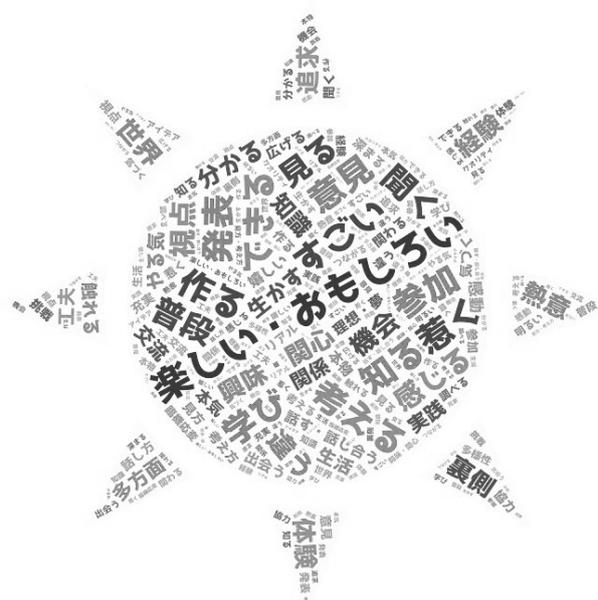


図 コメント出現数分析（ワードクラウド）

また、最後に、今回の実践を通じて編み出した知恵について報告しておく。それは「探究の条件」である。具体的には、①身近さ（半径5メートルの世界から）、②切実さ（そこに愛はあるか）、③オリジナリティ（足思手考で一次データを）、④価値（中学生・高校生だからこそ）、⑤インパクト（誰に届けたいか）、及び、⑥実現可能性（制約としての時間、お金、能力）である。

私たちの2回にわたる実践でもそうであったが、他校での探究活動の様子を踏まえても、生徒たちは、その場の思いつきでトピックを選び、テーマ化することが非常に多い。その際、教科学習における学びが参照されることも少ない。しかし、それでは少なくとも数ヶ月にわたる活動を継続・発展させるだけの動機を維持することはできない。また、探究の当事者意識や宛先意識がないままに、インターネット等で少し調べたものをそれとなくまとめるというケースも多く、そうなる表層的な調べ学習の域を超えない。最後の発表会に向けて、ひとまずポスターを作成すればいいという意識が教師・生徒の双方にあることも否定できないのである。他方で、野心が大きすぎるのか、自分たちの置かれた制約条件下では手に負えない壮大なテーマを掲げようとするケースもある。もちろん、そのま

ま突き進むと、途中で頓挫することになる。結果的に、労力と時間をかけたわりに、教師も生徒も確かな手ごたえを得ることができないままに不幸な結末を迎えることになる。

探究活動において、生徒の興味・関心、さらには主体性が重要なのは言うまでもないことである。ただし、それは生徒に「丸投げする」「口出ししない」こととは同義ではない。例えば、生徒たちのアイデアを手がかりにしながら、教師が「挑戦状」という形式で刺激的なアイデアを投げかけてもよい。「そこに愛はあるのか」「誰に届けたいのか」「誰と／どことつながればいいのか」「そこに新しさはあるか」「根拠はリアルで豊かか」などと生徒の認識を揺さぶり、建設的に対話し続けることも必要不可欠になる。生徒の実態にもよるが、必要に応じて、まずは教師が専門家や地域住民、関係諸機関につないであげた方がよい。さらには、「探究＝やる気になる」とは限らない現実があるので、教師が子どもを励まし、勇気づけてあげることも肝要になる。教師は生徒と「冒険」をともにする仲間として、もっと関わった方がいいのではないか。その時に探究の条件を共有しておきたいと私たちは考えたのである。実際にこれを提示したことで、生徒の認識とその後の動きは大きく変容した。「対象への愛を共に育む」、それこそが「探究による共創」へと人々を駆り立てるのだと感じている。

結局のところ、教師は探究活動にどう関わればいいのか。これは学校現場でもよく聞く悩みである。私たちの研究開発が掲げる基本コンセプト「共創する学び」における教師像は「ジェネレーター」である。井庭（2019, pp.17-18）によれば、ジェネレーターとは「生徒・学生たちとともに創造的活動に取り組む一人のメンバーとなり、一緒に『つくる』ことに参加」し、「その『つくる』活動のなかで、そのときどきに必要なことを教え、自らも『つくる』ために手を動かし、その実践を見て生徒・学生も学んでいく、そのような存在」のことである。「すでにあるものを渡すのではなく、生徒・学生と同じ側に立ち、ともに考え、自分も実際に手を動かすことで、一緒につくっていく」、 「それは、もはや、教える／教わる、（成果を外部から）評価する／評価される、という非対称的な関係性が崩れること」を意味しており、「創造を前に進めることの一翼を、外部からのアドバイスではなく、内側から担うことで、生徒・学生だけではできないレベルにまで到達することを一緒に成し遂げる」ことを役割とする、と特徴づけられている。

偶然の一致に驚くが、この教師像は私たちが常日頃から議論し意識し続けてきたものとはほぼ同じである。今では自分たちのことを「ジェネレーター」と呼ぶことにしている。実際の探究活動では、生徒たちが出してきたアイデアが自分の専門分野と関係する場合もあれば、関係ない場合もある。私たちも自分の専門とは全く異なる分野でこれまで挑戦してきた。正直なところ、不安は常にある。とはいえ、専門であろうとなかろうと、教師が全て指導・誘導する必要はなく、まわりの同僚や専門家、関係諸機関のチカラを借りればよい。各学校が所在する地域を「探究による共創」の舞台にすれば、それが実現可能なのである。そして、生徒と一緒に学び、挑戦し、創りあげていけばいいのだと考える。その冒険プロセスで得た教師の学びとネットワークは、必ず教師にとっても財産になる。私たちはそう信じている。共創という行為とその経験自体に価値があるからである。

今後、私たち自身が「ジェネレーター」としての力量を高めていくことはもちろんであるが、そうした教師をどう育てていけばいいのかという問いにも挑戦していきたい。その舞台は整いつつある。また、教師教育のみならず、探究活動の充実に向けて、次のようなカリキュラム・マネジメントに関わる問題や課題も学校現場では山積している。例えば、①探究よりも受験対策・検定対策という意識、②どうすればいいか分からないという戸惑い、③探究に充てる物理的な授業時間の少なさ、④単

年度扱いで計画される探究活動／引き継がれず単発で終わってしまう探究活動、⑤地域（専門家など）とつなぐことの大変さと教師の躊躇（外部人財を招聘する際の子算の問題を含む）、⑥教科と総合的な学習／探究の時間や特別活動との分断・乖離、⑦教師と生徒のマッチング課題（子ども一人1テーマ複数担当型、ジャンルが全く異なるグループ複数担当型の非現実性）、及び、⑧自然科学と人文・社会科学における探究スタイルの違いへの無自覚、などである。こうした一連の問いを正面から引き受け、引き続き、私たち自身の挑戦も積み重ねながら、学校現場とともに実践的理論の構築を図っていきたいと考えている。

---

## 注

- (1) 2018年2月17日（土）に昭和女子大学に於いて、「教科こえる、社会にひらく！共創する学びへの招待：中学校・高等学校がどこにどう向かうべきか？」をテーマに掲げ、開催した。
- (2) スーパーサイエンスコースとは、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校において、理数系に興味がある生徒を中学3年生から1クラスに集結させ、充実した理数プログラムを実践し、より高いレベルを目指すコースのことである。詳細は学校公式サイトを参照（<https://jhs.swu.ac.jp/course/science/>：2019年10月23日アクセス）。



- (3) 一般向けに第2弾の実践内容を紹介する冊子『Co-Cre Collection vol.1』も作成した。[http://iome.jp/project\\_pub/co-creative2018](http://iome.jp/project_pub/co-creative2018)（2019年10月28日現在）、あるいは、次のQRコードから閲覧が可能である。

---

## 参考文献

- ・井庭崇 編著（2019）『クリエイティブ・ラーニング』、慶應義塾大学出版会。
- ・緩利誠・青木幸子（2018）「Co-Creative Learning Session 2017：『食』をめぐる知の冒険に旅立とう！～共創する学びへの招待～」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』（4）、pp. 43-55。
- ・緩利誠（2019）「言葉踊る教育改革から心躍る学校改革へ」『日本教材文化研究財団研究紀要』（48）、pp. 4-10。

## 謝辞

私たちにとっては第2弾ではあるが、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校にとっては初めての取り組みであり、具体的な様子がイメージできないという「未知への不安」、さらには、正課ではなくアフタースクールプログラムとしての実施という負担にも関わらず、ご理解とご協力を賜った昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校の先生方、そして、何よりも生徒・学生たちにこの場を借りて感謝申し上げたい。なお、本研究はJSPS科研費JP18K02345の助成を受けたものである。